HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	彙報・活動・編集後記・規定
著者	
引用	年報新人文学(13)
発行日	2016-12-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

平成二十六年度 大学院文学研究科

❖学位論文題目一覧

修士学位論文

●日本文化専攻修士課程

氏名	修士論文題目
山森　未央	地域日本語学校の役割を探る ―カナダアルバータ州日本語学校教師へのインタビュー調査から―
田中　涼斗	諏訪社をめぐる宗教世界 ～諏訪の神の実像に迫る～
曹　雯	中国人学習者と日本語の「配慮表現」 ―場面別ロールプレイ調査からの考察―
寺崎民記哉	受入機関から見る実習生に関する考察 ―外国人職員を中心とする日本語や生活環境に関するインタビュー分析から―
中村真衣佳	現代日本語の色彩語が聴覚表現に転用する比喩の考察「黄色い声」発生の動機づけと位相・意味変化の要因

●英米文化専攻修士課程

氏名	修士論文題目
大木　七帆	Japanese EFL Learners' Knowledge and Use of Pragmatic Routines : How Can Instruction Help?

文学研究科教育・研究発表活動

◎二〇一六年度第一回「全体ゼミ」（修士課程二年・中間報告）

七月二日（土）（13：00～15：00）、本学AV4教室にて、修士課程二年に在学する四名が次の題目で論文の構想を報告した（発表順）。

山田萌果「描かれた少女たちにみるアブジェクト――芸術作品へジェンダーの視点からのアプローチ」

海藤　梓「横井小楠門弟集団の研究」

高橋真弥「ロバート・N・ベラーにおけるアメリカ宗教文化の理解――聖書的伝統と共和主義的伝統を中心にして」

井上みのり「マンガを用いた日本語教育――初級学習者に対する日本語教材の可能性」

◎二〇一六年度第二回「全体ゼミ」（修士課程一年・二年・中間報告）

十一月五日（土）（13：00～15：00）、本学AV4教室にて、修士課程一年・二年に在学する四名が次の題目で論文の構想を報告した（発表順）。

新田沙織「日本における神仙思想の展開」

大矢理彩「タイ人日本語学習者の学習動機の変化とその要因――質的研究法による分析から」

佐々木律子「元正天皇治世の意義――女帝天皇「中継ぎ論」の克服を目指して」

小山麗華「ダンテの『神曲　煉獄篇』と死生観――聖書と民間レベルの死生観の影響」

◎北海学園大学人文学会第四回大会

同日開催の総会に引き続き、十一月十二日（土）（14：00～17：00）、本学33番教室にて、「AIがヒトを超えるとき――相剋から共生に向かうために」と題するシンポジウムを開催した。ゲストとしてお呼びした森洋久先生の御講演のあと、本学の教員も参加して、AIとヒトの未来について活発な議論をした。

○ゲスト

森　洋久（国際日本文化研究センター准教授）

○パネリスト

佐藤貴史（人文学部准教授）

竹内　潔（工学部教授）

水野谷武志（経済学部教授）

山本健太郎（法学部准教授）

○司会

柴田　崇（人文学部教授）

編集後記

◉『年報 新人文学』第13号をお届けします。本号には論文三本、研究ノート一本、書評二本とヴァラエティに富んだ貴重な論考が揃いました。ご投稿いただいた方々、また厳正なる査読にご協力いただきました方々に心より感謝申し上げます。

◉川上武志氏には、巻頭言と、研究論文をご投稿いただきました。昨年、イェイツの翻訳『幼年と少年時代の幻想』(英宝社)を上梓されるなど日本におけるイェイツ研究を牽引し、また本学、本研究科で長きにわたり英文学を講じてこられた氏が本年度を以ってご退職されるのは、誠に寂しいことです。ここで、巻頭言にあるラスキンの一文を紹介しましょう。「画家が自然に向かうときに、その景色をたんに機械的に模写するのではなく、そこに啓示される神の意思を伝達する表現形式を求めなければならない、また鑑賞者にとっても、そこに『遍在する神』を看取するためには、想像力を働かせなければならない」。同僚のテレングト・アイトル氏が今年公刊の『詩的狂気の想像力と海の系譜』(現代図書)で「想像力」の系譜を鮮かに描き出し、文学の今日的意義を問い直したことと考え合わせても、文学を柱の一つとする人文学の復権にはある種の想像力が欠かせないことに思い至らずにはいられません。なお、本号には、柴田崇氏による同書の書評も掲載されています。

川上氏の巻頭文は、英文学の視点からの本研究科の理念たる「新人文主義」への提言であると読むこともできます。それは、グローバル化する現代において新たな意味でふたたび必要になる「ヒューマニズム」についての論考であり、本研究科に属する者にとって必読であることはもちろんのこと、現代に違和感を抱く人々にとって広く読まれるべき文章です。

◉研究論文を投稿して下さった鳥井俊祐氏は、立命館大学大学院言語教育情報研究科を経て、現在、浙江樹人大学東亜研究所兼職研究員としてキャリアを積む新進の研究者です。キャリアの円熟期と成長期の研究者の手になる論考が同じ巻に載っていることは、幅広い年代からの投稿があり、また新たな力による新陳代謝が続く本誌の特長と言えるかもしれません。中国における日本語スピーチ授業に関する論文をここ数年集中的に発表している鳥井氏の研究が本稿を起点に更に広く認められることを期待します。

また、博士(後期)課程に在籍中の森良太氏には研究ノートをご投稿いただきました。本誌が修了生や院生からの活発な研究発表の場となることは、大変喜ばしいことです。積極的な投稿をお待ちしております。

◉追塩千尋氏には今号にも研究論文をご投稿いただきました。公刊に必要な本数を満たせたことに気を取られてしまう編集担当者の悪癖はさておき、継続的に高い水準の論文が掲載されている点こそ本誌の価値であり、また存在意義と言えます。皆様の手で本誌が「本気」の研究発表の場としてますます認知され、かつ良き伝統が続いていくことを願ってやみません。

◉本号の彙報には、本年度がカリキュラムの移行の時期であることから、新旧のカリキュラムの両方を掲載いたしました。

(大石和久・柴田崇)

『年報 新人文学』投稿規定

一、『年報 新人文学』は、人文学に関する広範な分野の研究成果を掲載し、内外の研究交流を図ることを目的とし、年一回発行を原則とする。

二、投稿原稿の著者は、当人文学部及び文学研究科の所属者でなければならない。ただし編集委員会が認めた場合はその限りではない。

三、原稿は、原則、日本語とし、縦書き、種類と分量はそれぞれ次のとおりとする。

①原著論文で未発表のもの、四〇〇字詰原稿用紙五〇頁程度。

②研究ノート・資料・報告など、四〇〇字詰原稿用紙三〇頁程度。

③書評など、四〇〇字詰原稿用紙一〇頁程度。

④その他、編集委員会が必要と認めたもの。

四、原稿は編集委員会で厳正な審査を行い、採否を決定する。編集委員会は査読結果に基づき、原稿の一部変更を求めることがある。

北海学園大学大学院文学研究科
『年報新人文学』編集委員会